

千代田図書館蔵

古書販売目録 コレクション

日本における古書売買の歴史は古く、平安時代から始まり、それが職業として成立したのは江戸末期といわれます。そして明治になると店舗販売に加えて目録販売（通信販売）も積極的に行われるようになり、商品紹介カタログとして多くの古書販売目録が発行されてきました。

古書販売目録は一時的な利用を目的とした販売カタログであるため、長期間保存されることは滅多にありません。しかし、過去の古書販売目録からは、その時点で存在していた古書の概要や値段の変遷などを知ることができ、またその時々、書物の流通の手がかりを得ることができます。一点一点の稀少性というよりは、コレクションとして集まることにより、出版文化史を研究する上で重要な意味を持つてくる資料です。

千代田図書館の古書販売目録コレクションは、明治から昭和にかけて発行された目録類を中心とした約 9,350 点の資料群です。反町茂雄氏（「弘文荘」店主）、東京都古書籍商業組合、中野三敏氏（九州大学名誉教授）の寄贈資料から成るこれらの目録類は、大学図書館、公立図書館を問わず、図書館が所蔵するには全国的にも珍しいタイプのコレクションです。

千代田図書館と出版関連資料コレクション

千代田図書館は、千代田区の地域産業のひとつである出版産業を盛り立てて行くための様々な取り組みを行っています。出版・流通の貴重な資料である古書販売目録コレクションについても、「千代田区立図書館出版関連資料コレクション構築方針」に基づき収集・整理を行い、出版関係者や研究者をはじめとした皆様に広く活用していただけるよう、展示等を通して紹介しています。

平成 22 (2010) 年 3 月
千代田区立千代田図書館



絶版書展

古書大鑑

❖ 古書販売目録＝古書店の商品紹介カタログ

古書販売目録は、古書店が販売商品を紹介するために発行するカタログです。販売する古書の一点一点について、タイトルや著者などの基本情報に加えて、本の内容や解説、販売価格を記したものが基本的な古書販売目録で、商品の写真図版が掲載されている目録もあります。個人や大学などの顧客を対象にした通信販売用、デパートで開かれる展示即売会や古書業者向け入札会の告知を兼ねた出品物一覧など、いくつかのグループに分けられます。販売形態によって価格記載の

有無などの特徴がありますが、その大多数は顧客向け通信販売用の目録です。

古書店の取り扱い分野と同様に、一般古書から和、洋書、錦絵など幅広いジャンルに渡って掲載されているのが特徴です。近年では、冊子の目録を発行せずウェブ上に商品情報を掲載し、インターネットを利用して通信販売を行う古書店も増えてきています。これは目録販売の進化形とも考えられます。

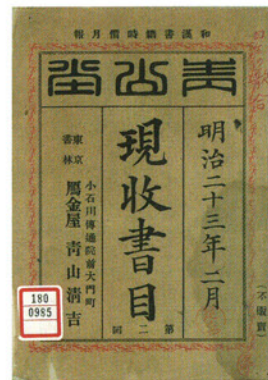


❖ 最初の古書販売目録

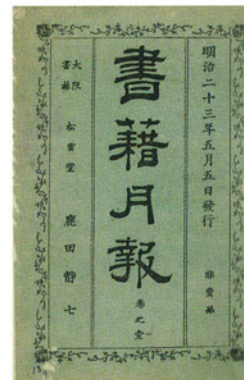
明治23年、東京にて『青山堂現収書目』（発行：鴈金屋青山清吉）、大阪にて『書籍月報』（発行：松雲堂鹿田静七）が発行され、これらが日本で最も古い古書販売目録とされています。インフラの整備と需要の拡大という追い風を受け、古書業界は目録販売という新たな販売方法の開拓に向けて大きな一歩を踏み出します。

明治22年7月1日、新橋と神戸をつなぐ東海道本線が全線開通しました。東西の要所を結びつけたこの鉄道は、人間の輸送だけでなく物資の迅速な流通も可能にしました。東海道線の輸送機能に着目した一部の古書業者たちは、目録を遠方の客に送り、古書を販売する方法を思いついたようです。交通が不便だった時代には各地に偏在していた古書が東西を容易に行き来するようになり、古書業界に活況をもたらしました。

また、学術・教育分野における西洋化の影響を受け、明治22年6月、帝国大学（現在の東京大学）は、「和文学科」を「国文学科」へと改組しました。この時期は、二葉亭四迷や森鷗外らを筆頭に、欧米の影響を受けた近代文学へ向かう動きが活発化する一方、高等教育の世界では、過去の古典籍を「日本文学史」として整理する試みが行われていきます。こうした近代的な国文学研究への流れの中で、文学作品を中心に、古典籍への認識が急激に高まりました。また、古書を考察や研究の対象として集積していくという発想が、人文科学分野全体に広がっていきます。



「青山堂現収書目」



「書籍月報」

❖ 古書販売目録からわかる“資料の存在”

世の中には、戦争や震災をはじめとする様々な事情により、現在では存在しない資料や所在を確認できない資料が多くあります。そのような資料が過去に古書店を介して流通していた場合、古書販売目録に掲載されている可能性があります。

資料のタイトル・著者・出版社・刊行年、また解説などが

目録に記されているため、今は実物が存在しない資料でも、その時点では存在していた事実やその概要を知ることができます。ここでは、古書販売目録から調査研究の手掛かりを得ることができた2つの事例をご紹介します。

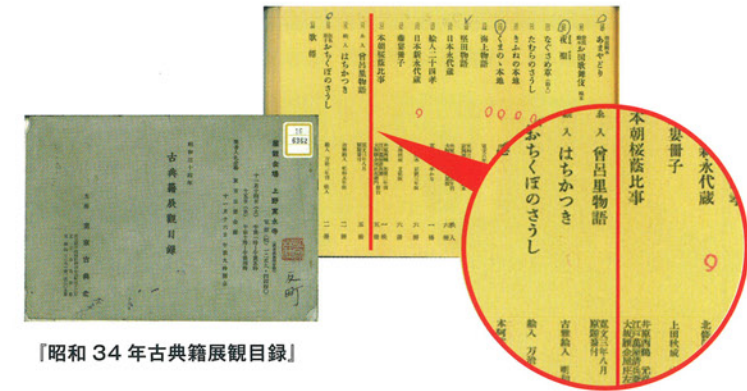
そろり

■『曾呂利物語』の刊行年

近世怪異小説の源流として有名な『曾呂利物語』の伝存本には刊行年の記載がないため、出版時期について研究者は悩んでいました。

昭和34年11月に開催された入札会の出品目録『古典籍展観目録』には、「寛文3年」の記載がある『曾呂利物語』が掲載されており、長年この目録が『曾呂利物語』の刊行年の拠り所とされていました。

この時出品された『曾呂利物語』の所在は現在もわかりませんが、平成4年の入札会に、「寛文3年」刊行の記載がある『曾呂利物語』（昭和34年掲載のものとは異なる品）が出品され、古書販売目録から得た刊行年の情報が裏付けられました。



「昭和34年古典籍展観目録」

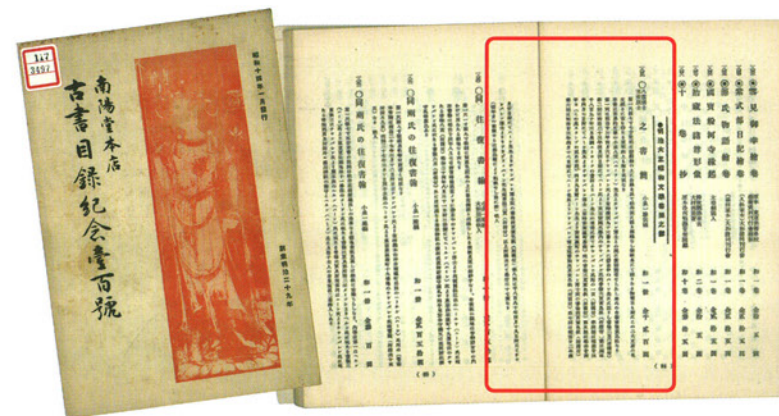
■小泉八雲とチェンバレンの交流のきっかけ

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）とチェンバレンに交流があったことは知られていますが、二人が出会ったきっかけについては、はっきりとわかっておらず諸説がありました。

最近、南陽堂本店の『古書目録第100号』（昭和14年）にハーンとチェンバレンの書簡が掲載されていることがわかりま

した。目録の解説に含まれる書簡の差出人情報から2人の交流の橋渡しをしたとされる人物が明らかになりつつあります。

現在のところ、この書簡そのものの所在は不明ですが、古書販売目録が史実解明の有力な手掛かりとなっています。



「南陽堂本店古書目録第100号」



（毎日新聞 平成21年2月2日）

反町茂雄と弘文荘

千代田図書館所蔵の古書販売目録コレクションの中核は、古書販売業「弘文荘」の店主・反町茂雄氏の旧蔵資料です。

反町氏は、質の高い古書販売目録の作成や貴重な古典籍の発掘など数々の業績を残し、古書の目録販売の発展に大きな影響を与えた人物の一人に挙げられています。平成3年に90歳で他界するまで現役の古典籍商であり続けた反町氏について、簡単にご紹介します。

「反町茂雄氏の人と仕事」より

❖ 東大を卒業し古書業界へ

反町茂雄は、明治34年、新潟県長岡市に生まれました。9歳のとき、父親の仕事の都合により東京の小学校に転入してからは東京で育ち、東京帝国大学に進学します。読書好きが高じて出版業界への就職を考えた反町は、岩波茂雄が古書販売から始めて出版社を立ち上げたことに倣い、昭和2年、26歳で

神田神保町の古書店「一誠堂書店」に就職しました。輝かしい肩書も望める東京帝国大学法学部の卒業生が、学歴を問われない古書店の住み込み店員として就職したため、変わり種として話題を呼び、帝大新聞にも取り上げられました。

❖ 一誠堂書店での修業、そして独立

知識が豊富で一生懸命働く反町は、主人に重用され数カ月で店務を統括するようになります。外商販売や目録販売など、店頭販売以外の手法を開拓して店の活性化に手腕を発揮し、また大規模な売立入札会の開催を通して人脈を築いていきました。出版業を志しその足掛かりとして古書店に就職した反町でしたが、次第に古書販売の面白味に惹かれ、古書販売業で独立する決意を固めていきました。

多くの書物から得た知識と一誠堂で積んだ経験、そして顧客の信用を蓄えた反町は、昭和7年に31歳で独立します。貴重な本・珍しい本を専門に扱う古書店「弘文荘」を創業し、西欧の古書店を参考に、店舗を持たず目録販売のみでの商いを目指しました。顧客と一緒に多くの貴重書に接して知識を深め、弘文荘を発展させていきます。

❖ 後輩の育成に尽力した反町

反町は自身の研鑽と後輩の育成にも関心が高く、一誠堂時代には店員仲間とともに和書や古典籍の勉強会「玉屑会」を結成し、古書店員のための雑誌「玉屑」を発行しました。戦後は古書店の跡継ぎや子弟を集め「文車の会」を組織し様々

な活動を行いました。70代で若手の視野を広げるため海外への視察旅行を企画し、入院中も原稿の校正を行うなど、反町は生涯を通して若い同業者の育成に力を注ぎます。自分にも他人にも厳しく、高い理想を追い続けた反町でした。

❖ 弘文荘の目録

反町が発行する「弘文荘待買古書目録」をはじめとする古書販売目録は、綿密な調査・研究に基づいた解説と写真が掲載されているため、研究者からも高い評価を得ています。

「待買」とは「客を待つ」を意味しており、反町が崇敬した江戸時代の書籍商・達磨屋五一の屋号「待買堂」から取られました。

解説の内容やわかりやすさ、写真にもこだわった弘文荘発行の目録は、書名・著者・出版社・出版年に保存状態の簡単な説明を加えただけの従来の古書販売目録とは一線を画しました。反町にとって目録は、単なる商品紹介カタログを超え、精力を傾けた仕事の記録であり、業績そのものでもありました。



❖ 『為家本土佐日記』の発掘

反町が扱い、弘文荘の目録に掲載された商品のなかには、後に国宝や重要文化財に指定されたものも多数あります。わが国最初の仮名日記として有名な『土佐日記』は、藤原定

家による写本が国宝として知られていましたが、昭和59年、藤原為家による『土佐日記』の写本が反町によって発掘され、研究者たちを大きく驚かせました。

「鎌倉時代の物だそうだが、処分したい」と、弘文荘に持ち込まれた品を、反町が為家本であることを調査・確認し『弘文荘敬愛書図録Ⅱ』に7,500万円の値を付けて掲載しました。紀貫之の自筆原本をきわめて忠実に写した為家本は、国文学や国語学の研究において大変重要な資料になるとして、古書では戦後最大級の発見と言われました。『為家本土佐日記』は大学図書館の所蔵となり、平成11年、国宝に指定されました。



「弘文荘敬愛書図録Ⅱ」より

❖ 反町と地域の文化財

反町は地域の文化財を守ることの重要性を唱え、戦災で多くの貴重な資料を焼失してしまった故郷・長岡市の図書館に多くの資料寄贈と寄付を行いました（長岡市立図書館反町茂雄文庫）。また、戦時中は、東京都立図書館の戦時特別図書買い上げ事業（民間の学者や蔵書家から資料を買い上げて疎開させる事業）に関わり、多くの貴重資料を戦火から守りました。反町は、これらの活動を評価され、新潟日報文化賞（昭和57年）、東京都文化賞（平成3年）を受賞しました。



「東京都文化賞受賞式にて」（「反町茂雄氏の人と仕事」より）

千代田図書館の古書販売目録コレクション

千代田図書館が所蔵する約 9,350 点の古書販売目録コレクションは、それぞれの特徴から大きく 6 つに分類されます。

- 反町茂雄氏 + 東京都古書籍商業協同組合 【平成 11 年度より公開：約 6,880 点】
反町茂雄氏(古書販売業「弘文荘」店主)が創業以来 60 年間に収集したもの、および、東京都古書籍商業協同組合が大市会(平成 8 年)を記念して収集したもの。平成 8 年、茂雄氏の長男・反町雄一氏と平尾一善氏(東京都古書籍商業協同組合・当時理事長)からご寄贈いただきました。
- 中野三敏氏 【平成 22 年度より公開：約 2,470 点】
中野三敏氏(九州大学名誉教授)が収集したもの。平成 18 年、中野氏ご本人からご寄贈いただきました。

① 古書店が発行した販売目録

(明治 23 年以降、約 7,700 点) 分類名：書店別



全国の古書店が個人や大学などの顧客向けに発行した販売目録で、掲載品の価格が記載されています。店頭販売を行う古書店だけでなく、反町茂雄の弘文荘のように、店舗を持たず目録販売のみで営業を行う形態の古書店もあります。個々の古書店が単独で発行するのが一般的ですが、複数の書店からなるグループが発行する共同販売目録もあります。

② 即売会の出品目録

(明治 44 年以降、約 740 点) 分類名：即売会



古書業者が数店集まって、東京古書会館やデパート会場で一般客に売る、いわゆる古書即売展の出品目録。目録に掲載されるのは会場に出品される主要な商品なので、目録のタイトルには「出品抄」「目録抄」などの表現が多くみられます。価格は目録に記載されており、熱心な収集家は事前に目録を確認し、各書店に注文します。

③ 入札会の出品目録

(明治 44 年以降、約 530 点) 分類名：入札会



古書業者あるいは古物商・古美術商などが集まる入札会には、一般客は参加できません。ただし、入札会の前に行われる下見会に一般客が参加可能な場合もあります。入札開催の前に発行するため価格は記載されていませんが、書き入れなどから落札価格がわかることもあります。古典籍を主に扱う東京古典会や近代の資料を扱う明治古典会など、ジャンルごとに行う入札会のほか、蔵書家の死去などに伴って一斉処分するための売立入札会の目録も含まれます。

※気に入った出品物があれば、馴染みの古書店に入札を依頼する

④～⑥は古書販売目録ではありませんが、古書店主にとって関係の深い資料であり反町茂雄が収集していたことから、千代田図書館では古書販売目録コレクションの一部として扱っています。

④ 展覧会の出品目録

(明治 30 年以降、約 90 点) 分類名：展覧会

大学や図書館・新聞社・ミュージアム等が主催し、古典籍などが展示された展覧会の出品目録。展覧会に出品されるものと同様の貴重な資料を扱う反町は、展覧会へ足を運び、目録を入手して勉強することも多かったようです。

⑤ 図書館や文庫の蔵書目録

(明治 9 年以降、約 120 点) 分類名：蔵書

各種図書館や文庫などの蔵書目録。大学図書館なども顧客であった反町には、顧客の所蔵状況は重要な情報だったのでしょう。

⑥ その他の資料

(明治 18 年以降、約 170 点) 分類名：その他

古書販売に関する本や各種刊行物のほか、手書きメモなど様々なものが含まれています。

千代田図書館の古書販売目録コレクションの利用方法

- ① 下記検索システムもしくは冊子体目録(メインカウンターにあります)にて、資料名・分類名・ボックス番号・資料番号を確認
- ② 「古書販売目録 請求用紙」に記入の上、メインカウンターで申し込み

※当日の閲覧件数は 10 点までです。11 点以上の閲覧をご希望の場合は、事前にご相談ください。
※くわしくは、職員までお問い合わせください(資料の劣化や整理作業のため閲覧いただけない場合があります)

資料番号	資料名	発行年	冊数	備考
1001	弘文荘 古書販売目録	1971	1冊	表紙に「弘文荘」の印あり
1002	西武 古本まつり	1971	1冊	表紙に「西武」の印あり
1003	東京古書会館 即売会出品目録	1971	1冊	表紙に「東京古書会館」の印あり
1004	明治古典会 入札会出品目録	1971	1冊	表紙に「明治古典会」の印あり
1005	東京古書会館 即売会出品目録	1971	1冊	表紙に「東京古書会館」の印あり

千代田図書館が所蔵する古書販売目録コレクション約 9,350 点を、インターネットで検索することができます。書店名、発行年、掲載書物の種類による検索のほか、書店別の販売目録、共同販売目録、入札会目録、図書館や文庫の所蔵目録など、分類毎の一覧を見ることもできます。

<http://www.library.chiyoda.tokyo.jp/search/kosho.html>

千代田図書館所蔵
古書販売目録の
検索システム

千代田図書館の古書販売目録コレクションの中から、古典籍類を中心に掲載された目録の一部について、影印版が刊行されました。

柴田光彦編『反町茂雄収集 古書販売目録精選集(全 10 巻)』ゆまに書房, 2000.8

柴田光彦編『反町茂雄収集 古書蒐集品展覧会・貴重蔵書目録集成(全 8 巻)』ゆまに書房, 2001.12

❖ 古書販売目録の発展

	社会のうごき	高等教育機関のうごき	神田神保町と古書店のうごき	古書販売目録の発展
江戸 (1603-1867)	慶応3年 ・大政奉還	江戸末期 ・官立の藩書調所(のちの東京大学)や 蘭方医学の研究機関が設立される ⇒洋書の需要高まる	江戸時代 ・神田神保町近隣は旗本の屋敷が多く、書物を 扱う店は一軒もない	
	明治 (1867-1912)	明治10年代 ・早稲田をはじめとする私立大学が 次々と開設され始める ・華族向けの漢学塾、英語塾が増加 明治20年代 ・近代的な国文学研究が進展する ⇒日本の古典籍への認識と 需要が高まる 日露戦争前後 ・私立大学・専門学校の整備・充実	明治10年代 ・神田神保町近隣に書物を扱う店が現れ始める 明治20年代 ・郵便制度、交通、通運が発達 ・各種学校が発展、学生が増加 ・大量印刷、大量出版の実現 ・通信制度、製紙、印刷技術の発達 ⇒これらにより古書の目録販売の発展条件が ほぼ満たされる 日露戦争後 ・中国人留学生が増加し、新本屋や古書店など 神田神保町の本屋街の大きな顧客になる ・本の需要に応える動きが活発化 ⇒古本交換市が発展する	明治23年1月頃 ・鷹金屋青山清吉(東京)が 目録を発行開始 同年5月 ・松雲堂鹿田静七(大阪)が 目録を発行開始
大正 (1912-1926)	明治22年 ・大日本帝国憲法発布 ・東海道本線が全線開通 明治27-28年 ・日清戦争 明治37-38年 ・日露戦争	大正7年 ・大学令制定により、私立大学が 認可、新制高等学校が設立 ⇒大学が資料を購入する 大正12年 ・関東大震災により重要な書物や 研究業績類が焼失 関東大震災後 ・中央大学、明治大学、日本大学が華 族の罹災跡地を入手、拡張 ・被害が激しい東京商科大学(のち の一橋大)と東京工業大学が郊外 に移転 ・京城(韓国)、台北(台湾)、大阪、 名古屋など、新たな帝国大学が設立 ⇒大学の資料購入が促進される	大正2年2月 ・神田神保町の学校街・本屋街が大火に見舞われ、 古書街や各大学で多くの貴重書が焼失 ⇒古書の需要につながる 大正9年 ・東京古書籍商組合が成立し、神田神保町を中心に 組織化が進む	明治44年 ・浅倉屋吉田久兵衛が目録を 発行開始 大正2年 ・村口書房が目録を発行開始 大正14年11月 ・一誠堂書店が目録を発行開始
	大正12年 ・関東大震災	昭和 (1926-1989)	昭和初期 ・円本(1円の本)の大流行 ⇒低価格競争による出版社の倒産が相次ぐ ・大学への古書の売り込み増加 ・共同即売会の増加 ・外国通貨が暴落し、新規の書籍輸入業者が増加 昭和3年 ・日本図書館協会が図書館の振興運動を展開し、 震災で減少した図書の実用化をはかる 昭和9年 ・「日本古書通信」創刊 昭和16年頃から ・官庁からの抑制(印刷、紙の統制、若い工員の 兵役徴収など)による出版業界の事業規模の縮小 ⇒新刊書の発行量が減少し、 書籍販売業が不況に陥る 昭和20年頃 ・戦後の混乱期に日本の古典籍が海外へ多数流出する ・輸入が自由化される ⇒海外から書物の輸入が盛んに行われる 昭和39年 ・日本の古書業者が世界古書籍協会(ILAB)に 出席するなど、国際化の動きが活発になる 昭和40年前後 ・明治生まれの古書店主らが相次いで引退し、 古書業界の世代交代が進む 昭和54年頃 ・出版点数の増加に伴い、大量の本が古書店で 扱われる	昭和3年 ・蔵松堂書店が目録を発行、 図書館や大学に配布 ・一誠堂書店が図書館や学校向け の目録を全国の公共機関に配布 昭和8年 ・弘文荘が目録発行開始 昭和12年-13年頃 ・目録発行数が増え、戦前の 最盛期と呼ばれる 昭和18年-19年頃 ・物資の不足等で目録の発行が 年を追って減少し、昭和12年 ごろの1/3程度に 昭和20年12月 ・戦後、沖森書店(三重)がいち早く 目録発行を再開 昭和33年頃 ・官庁・学校方面からの需要が落 ち着き、増加傾向にあった戦後の 目録発行数が減少に転じる
昭和4年 ・昭和金融恐慌 昭和6年 ・満州事変 昭和20年 ・第2次世界大戦終戦 昭和25年 ・朝鮮戦争 昭和31年 ・国際連合加盟 昭和31-32年 ・神武景気 昭和39年 ・東京オリンピック開催 昭和61-平成3年 ・バブル景気	平成 (1989-)	平成7年ごろ ・Windows95の普及に よりインターネット が一般に浸透 平成19年 ・明治大学が図書館と古書店の 横断検索システムを導入	平成9年 ・古本検索のWebサイト「日本の古本屋」 「ブックタウン神田」開設 平成18年 ・「ブックタウン神田」に新刊書・イベント情報を 加えたWebサイト「BOOK TOWN じんぼう」開設 平成19年 ・「BOOK TOWN じんぼう」に飲食店情報を加えた 地域紹介Webサイト「神保町へ行こう」開設	平成7年ごろ ・Webサイト上に商品情報を 掲載して、インターネットで行う 通信販売が広がっていく

【企画展示】千代田図書館古書販売目録紹介展示「反町茂雄と古書販売目録」
2010年1月25日～3月27日
千代田図書館 9階 展示ウォール

千代田図書館
千代田区九段南1-2-1 電話 03-5211-4289
このパンフレットは、千代田図書館で行った企画展示のパネルをもとに作成しました。